

健康文化

一年一昔

高田 健三

十年一昔という諺がある。ものの本に依れば、人や社会は、十年も経つと著しく変わるものであると言う。しかし今の時代は一年も経たないうちにがらりと変わってしまうほどの速さで進んでいる。ついて行けない人は脱落者としてふるい落とされてしまう。今や一年一昔なのである。同じ時間軸が何にでも適用されると思っているのは大きな間違いを起こすことになる。

私は去る6月に88才になり、世に言う米寿を迎え、友人知人にお祝いの言葉を頂くことがある。“日出度くもあり日出度くもなし”とはある有名人が言った言葉であるが、私自身、今そんな気持ちである。と言うのも、健康状態が良ければ大変嬉しいと思えるが、腰痛症に悩まされている今、どうして自分はこんな状態で生きているのかと思うと、自分のからだ自身が憎らしくなることがある。お祝いを言って頂く人に申し訳ないと思うこともしばしばである。

日本人男性の平均寿命が87才という最近のデータを何処かで見たように思うが、そうすると私は生き過ぎだと思える。一年ぐらいいはと言うなかれ、今の世の中の進歩の中で、一年は、昔の十年に匹敵するのである。寿命に就いてみれば私は十二分に生きてきたことになると思っている。そうかといって、今の生命科学の驚異的な進歩はそう簡単に一生を終わらせてくれない。問題は一生の“質”であろう。自分が満足感を持てるか、社会に些かでも貢献できたか、振り返ってみると、不十分なことばかりである。

私の大学現役のころ、研究課題は細胞分化のメカニズムであった。分化の方向を決めるのは細胞膜か細胞質か細胞核かの問題は、最近、京都大学のグループが巧妙な方法で解決し、ノーベル賞を受けたことは我が国の研究者に強烈な刺激を与えたことは周知のことである。

生きることが有意義かどうかは、常に刺激を受けるか否かによって決まる。私自身、今でも刺激を受けること、或いは人に与えることに興味を持っている。そんなことでトラブルを起こすこともあるが、其れも刺激の一つである。

健康文化振興財団が創設され、同時に財団広報誌、「健康文化」が発行されることになった時、林文子理事長、佐久間貞行理事（名古屋大学医学部教授）か

ら、専門的ではなく、俳句や和歌も含めて気楽な文章を書いてみてはと誘われて、己の凡才を省みず、書き始めてから今日に至る。其れは私にとって正に専門外で大きな刺激になったと思っている。

ところがこの7月の中頃、ちょっとしたものを右から左に動かしたとき、腰に痛みを感じた。そんなことはよくあることで大したことは無いと思った。しかし其れは若いときのことで、戦時中、学徒動員に駆り出されて、軍用品等を運ぶ力仕事がしばしばであったが、腰に掛かる負担は相当なものであった。時には腰椎が滑るような思いをしたが何事も無かった。若いと言うのは素敵なことで、その時代を有意義に生きることは人生の中で将来を決める最も重要な時である。しかし自分が後期高齢者であることを忘れて、行動していることを思い知らされた。友人に何が原因かと聞かれると、返事に困ることがしばしばであった。

専門の病院で診てもらったところ、レントゲン検診とMRI検診で、1個の腰椎骨が少しずれていて、側を通る神経束を圧迫していることが痛みの原因であることが判った。痛み止めの薬を飲んでいる限り通常の生活が出来るが、私の人生に一つ負担が増えたことになった。これも後期高齢者の運命といおうか。

(名古屋大学名誉教授)